

戦略グループ会議 報告書

<p><戦略グループ会議の名称> 谷津田の生物多様性保全</p>	<p><参加人数> 33人</p>
<p><主催グループ名> ちば環境情報センター、ちば・谷津田フォーラム</p>	<p><代表者名></p>
<p><実行委員名> 田中正彦、小西由希子</p>	<p><共催（協力）団体名> ちば環境情報センター ちば・谷津田フォーラム</p>
<p><開催日時> 2007年5月25日</p>	<p><開催場所> 県庁1階多目的ホール</p>
<p><会議で話し合われたテーマの概要></p> <ul style="list-style-type: none"> (1) 調査・研究・普及・啓発 (2) 環境学習 (3) 谷津田の生物多様性を保全していくために必要な政策 (4) 谷津田で農業を成り立たせるには 	
<p style="text-align: center;">各グループ会議からの提案</p>	
<p>1. 各グループ会議にとって、生物多様性の保全・再生のための課題は何ですか。</p> <ul style="list-style-type: none"> (1) 調査・研究・普及・啓発 (2) 環境学習・・・見たり聞いたりする機会がない。生き物のいることがどんなに気持ちのいいことか理解されていない。自然体験は重要だが、一過性のものにならないように。 (3) 保全の政策・・・生物多様性の目標があいまいであること。価値観の共有化（都市住民、農家、行政）。食糧生産・農地保全と生物多様性の両立。農業振興・景観・自然環境の保全のネットワークを市町村ごと集落ごとに明らかにする必要がある。 海から谷津田まで生物が自由に行き来できるような河川整備を行う。 (4) 谷津田で農業を成り立たせる <p>2. 課題を解決するために、何をすべきですか。</p> <ul style="list-style-type: none"> (1) 調査・研究・普及・啓発：谷津田のよさを再認識するための、全県一斉調査（環境、生物相、農家への聞き取りなど） (2) 環境学習・・・谷津田での楽しい体験の発見をこどもに伝えよう。 (3) 生物多様性と食糧生産・農地保全が両立できるよう、関係法令、制度を見直し、改正する。保全すべき谷津田、自然に戻すべき谷津田を色分けし、市町村の土地利用計画やマスタープランで位置づける必要がある。 (4) 谷津田での農業 <ul style="list-style-type: none"> ①自家消費する安全な米、おいしい米を生産し、谷津田全体から恵みを恵む場として位置づけ、就農に手を上げる人を募る。手を上げている人がエントリーしていくことができるシステムを作る。 ②残すべき谷津田、そうでない谷津田をきちっと定めていく。また、谷津田での耕作に手をあげる人がどれだけいるか調べる。→谷津田として残すところは、国有化、県有化し、支援をしていく。 	

3. 誰が、どのように進めますか。(県民、事業者、行政等の役割)

(1) 調査・研究・普及・啓発

①生物・地形・地元の人への聞き取り・・・県民が行う(指導は、博物館や農業改良普及員)

効果：谷津田の価値を見直す「再発見」、地元や世代の感覚・価値観を重視、保全のゾーニングができる

②メッシュを利用した調査(保全対策)多様性調査

学校をどう取り込むか。コミュニケーターを養成し、谷津田の価値を伝えられる人が必要。(マスコミも利用)

③継続的モニタリングも必要

(2) 環境学習

①学校の総合学習に取り入れる

②担い手→プロの農家(高齢)の指導をしてもらう。学校とプロの農家をつなぐ場を作るのはNPO。地域のお兄さん、お姉さんといっしょに

(3) 県民、市町村の声をまとめて、県・大都市が国へ提案・要望し、ディーゼル規制のように、国の法制度を変えていく。改正された法制度を武器として、県・市町村・県民が生物多様性に必要な施策を展開していく。

県土整備部や農林水産部が中心となって、堰には魚道を設置するなど、海と谷津田とが命で繋がるような環境整備を実施する。また、谷津田の土水路は極力残し、継続的に維持管理していく。

4. 自由記述

トキやコウノトリが生息可能な谷津田を目標に、継続的な保全と活用を推進する。

ウナギが海から谷津田まで遡上できるように、河川環境の整備を実行する。

※1枚で収まらない場合は、2枚になってもかまいません。

戦略グループ会議 報告書

<p><戦略グループ会議の名称> 歴史・文化と生物多様性</p>	<p><参加人数> 30人</p>
<p><主催グループ名></p>	<p><代表者名> 外川宏予</p>
<p><実行委員名> 高谷秀司、伊藤照夫</p>	<p><共催（協力）団体名> ①NPO ミュージックカフェ ②(株)アイ・ティー・オー</p>
<p><開催日時> ①平成19年6月21日（木） ②平成19年7月7日（土）</p>	<p><開催場所> ①池上本門寺 ②オーガニックレストラン・カムー</p>
<p><会議で話し合われたテーマの概要></p> <p>① 国際社会における生物多様性の今昔 世界には生物多様性推進に障る歴史文化がある中、仏大使館後援の音楽祭において、房総の里山を宣伝する組曲を公演した結果、仏大使館から本国での公演依頼を賜り、芸術を使った啓蒙が有効であったことがわかりました。</p> <p>② 農産物輸入マーケットに改造された現代日本における自給自足の再生と、交易バランス/ 生物多様性の再生方法として、県内全域の農地を無農薬有機栽培にすることを目標に据え、日本の自給自足崩壊の原因を日本史から検証し、自給自足再生の啓蒙方法を無農薬有機野菜宣伝レストランにて体感しました。</p>	
<p>各グループ会議からの提案</p>	
<p>各グループ会議からの提案</p> <p>3. 誰が、どのように進めますか。(県民、事業者、行政等の役割)</p> <p>旧暦に基づく伝承を調査収集</p> <p>県は、農業者や漁業者や酒造業者他の県民に呼びかけて、伝承者が存命のうちに大急ぎで旧暦に基づく伝承を調査収集します。</p> <p>また、調査収集と同時進行で、県民便りには、その月の旧暦の暦と歳時記や生活の知恵を掲載していき、県のホームページでは、旧暦の生活の知恵を活用した感想を募集し、掲載していきます。</p> <p>そして、県民の関心が高まったところで、県民便りの発行を旧暦の月初めに変更します。</p> <p>標語</p> <p>県が、生物多様性を最上級の価値として位置づける標語を、広く県民から募集し、それらの中から、<u>県内小学生高学年・中学生・高校生らの投票によって選ばれた1句を、「県語」とします。</u>そうすることで、<u>子供たちに、自分達が未来の社会を創って行くという自覚が芽生え、また同時に、その類い稀な試みは、報道関係者の興味を引き、全国媒体や国際媒体での啓蒙効果も期待できます。</u></p> <p>農産物のブランド名</p> <p>県が、千葉県産の有機無農薬作物のブランド名を、<u>広く県民から募集し、それらをインターネット投票で選び、ブランド名を決定し、商標登録します。</u>なお、ブランド名の使用は、生産農家の申請に基づいて<u>行政が適正を判断した上で許可し、使用料は無料とします。</u></p> <p>給食</p> <p>行政が、<u>県内小中学校の給食の献立に、月に一度、あるいは学期に一度、『無農薬有機野菜の日』を設けます。</u>キュウリやトマトなどを生で丸ごと供給し、また、タマネギやナスなど季節の野菜はオープンで丸焼きして供給し</p>	

て、さらに、生産農家の耕作写真や映像等を見ながら会食をします。また、総合学習等に組み込める学校は、農業の体験実習を兼ねてもいいでしょう。そうすることで、農業が台所のように身近に感じられ、生産農家と収穫の喜びを共感でき、未来を担うこどもたちにとって給食時間が、無農薬有機野菜を食の基本として認識する教育現場となります。なお、生産農家には、耕作過程での撮影や、体験実習の受け入れ協力をお願いします。そして、給食における無農薬有機野菜の需要によって、無農薬有機栽培農家を支え、また、『無農薬有機野菜の日』を増やすことで、ゆくゆくは、毎日の給食への供給にも繋げることができ、より多くの無農薬有機栽培農家を支えることができます。

芸術作品

県民が、千葉県の生物多様性をテーマにした芸術作品を県内外で発表する場合、定められた文書の提出をもって、県民だより、県のHP、県の生物多様性センター、並びに関係市町村の広報誌等、行政が所有する媒体に予告を無料で掲載します。

生態系型経済効果の創造

県は、県民の美容・健康願望をくすぐるような、癒し系の、里山里海再生をテーマとしたリゾート開発を行います。その際、管理栄養士が、関係地域の飲食店に、美容と健康に優れたオーガニックメニューを講習し、県が無農薬有機農家と飲食店とのコーディネートをします。

世界初の美容と健康の食をテーマにした房総のリゾート開発は、観光産業を振興し、農薬有機農家を増やし、利益が生物多様性を牽引しつつ、命の再生で繋がる『生態系型経済効果』を創造します。

1・西暦によって失われた「自然の持続可能な利用の知恵」を再構築し、また、生物多様性及び生態系の一員としての人間社会を創造するための課題

18世紀より、ヨーロッパ諸国による植民地支配の流れはインド・東南アジアに及び、中国に至っては米国も加わって半植民地支配が始まり、日本にも江戸時代後期から自給自足の基盤に亀裂が入り始めます。そして、明治時代には、独立国の象徴である暦が欧米の暦に改暦され、旧暦(太陰太陽暦)明治5年12月3日が西暦明治6年1月1日に換えられて現在に至ります。それに伴って春夏秋冬も1ヶ月前後早く訪れることになり、自給自足を支えてきた農業や漁業等「自然の持続可能な利用の知恵」や「自然との共生の方法」が盛り込まれた旧暦が、その効力と価値を失っていったのです。旧暦の知恵を再生することが課題です。

そして、その西暦は、過去の地球規模の津波や洪水の研究の大きな障害にもなっています。それは、キリストの生誕年が西暦元年よりも4年から7年前であったことが、世界の大方の歴史学者の認めるところだからです。すなわち、西暦に基づいた地球の公転回数は、実際よりも4回から7回多いのです。このことは、紀元前の天文記録と天災記録との相関関係を、西暦において、地球規模で比較検証することができないことを意味します。従って、県や専門家や県民は、地球温暖化に係る天文学的あるいは地質学的な記事を参照する際、西暦を基に算出された検証であるかどうかを、留意する必要があります。

ただし、こうした欧米の流れを検証する際、憲法20条に保障された信教の自由を侵さぬよう注意しなくてはなりません。そこで、県は、生物多様性を損なってきた欧米の考え方を知り、信教の自由を侵さぬよう生物多様性の保全・再生の重要性を啓発することが課題であると考えます。

そして、県民の理解を得た上で、県内全域の農地で無農薬有機栽培を実現することが、生物の多様性に富んだ千葉県を創造するための最終課題であると考えます。

なお、生物多様性の保全や再生には、「経済が低迷するのではないか」というイメージが付きまといまいます。そこで、生物多様性を再生する経済効果を創造することが課題と考えます。

2. 課題を解決するために、何をすべきですか。

旧暦の知恵を再生する

農業者や漁業者や酒造業者他、県民から大急ぎで旧暦に基づく伝承を調査収集しなければなりません。伝承者が存命のうちに。

例えば、旧暦の七夕（2007年は8月19日）には畳や衣類などを虫干しする。

例えば、月初めのフキはおいしい、等等。

生物多様性を損なってきた欧米の考え方の根拠を知り～

『人類は万物の霊長(primat；英国教会大主教・カトリック首座大司教)』という考え方の根拠

「神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女を創造された。神は彼らを祝福して言われた。産めよ、増やせよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這う生き物全てを支配せよ。」(新共同約・旧約聖書創世記1：27,28)

『農業は愚か者の苦役』という考え方の根拠

「神はアダムに向かって言われた。お前は女の声に従い取って食べるなど命じた木から食べた。お前ゆえに、土は呪われるものとなった。お前は、生涯食べ物を得ようと苦しむ。お前に対して土は茨とあざみを生えいでさせる野の草を食べようとするお前に。お前は顔に汗を流してパンを得る土に返るときまで。」(新共同約・旧約聖書創世記3：17～19)、「主なる神は、彼をエデンの園から追い出し、彼に、自分がそこから取れた土を耕させることにされた。」(新共同約・旧約聖書創世記3：23)

『聖なる者の職業は建設業』という考え方の根拠

「安息日になったので、イエスは会堂で教え始められた。多くの人々はそれを聞いて、驚いて言った。この人はこのようなことをどこから得たのだろう。この人が授かった知恵と、その手で行われるこのような奇跡はいったいなにか。この人は、大工ではないか。マリアの息子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか。姉妹たちは、ここで我々と一緒に住んでいるではないか。」(新共同約・新約聖書マルコ6：2,3)

～信教の自由を侵さぬよう生物多様性の保全・再生の重要性を啓発する

国内でも前記3つの概念の影響が強く、宗教意識もないのに、社会通念として多数の心に深く根ざしています。そこで、そういう人々には、心や本能に届きやすい標語、農産物のブランド名、芸術作品などを使って、自然の厳しさと豊かさを少し制御できた人類の喜びを魂に届け、また、人間と自然との持続可能なハーモニーを感性に響かせていくことが、有効な啓蒙方法だと考えます。

さらに、前記3つの概念を様々な情報源から吸収してしまう以前の子供の段階に、生物多様性の再生を大きく担う農業の尊さを、給食という教育の場で啓蒙していくことが大切と考えます。

県内全域の農地で無農薬有機栽培を実現する

旧暦の知恵の再生や啓蒙活動によって、県民の間に生物多様性推進への理解が高まることが期待でき、県や市町村の予算を生物多様性の保全・再生に係る事業により多く配分し、県民に経済的負担の少ない無農薬有機作物を供給することで、結果的に県内全域の農地で無農薬有機栽培が実現すると考えます。

命の再生で繋がる生態系型経済効果を創造する

開発事業を計画する際、従来のように金のみで繋がるピラミッド型の経済効果ではなく、生物多様性の再生に繋がるような、命の再生で繋がる生態系型経済効果を創造します。

戦略グループ会議 報告書

<p><戦略グループ会議の名称> 化学物質と生物多様性・松戸会議</p>	<p><参加人数> 20人</p>
<p><主催グループ名> 化学物質と生物多様性県民会議G会議・松戸</p>	<p><代表者名> 中岡丈恵</p>
<p><実行委員名> 茂木久子、中川文子、渋谷留雄、土田茂道、中岡丈恵</p>	<p><共催（協力）団体名> 松戸市環境企画課河川清流課</p>
<p><開催日時> 平成19年6月21日</p>	<p><開催場所> 千葉県東葛飾合同庁舎 (松戸市)</p>
<p><会議で話し合われたテーマの概要> 講演・課題提案「室内環境と化学物質暴露による健康リスク・次世代の健康が守れるのか」 車座会議・テーマが大きく絞れなかったが、参加者の経験が異なり初めての方から斬新意見聞かれた。 時間が足りない分アンケートにより意見を出していただいたので自由記述にまとめました。</p>	
<p>各グループ会議からの提案</p>	
<p>1. この会での生物多様性の保全・再生のための課題は何ですか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生物の生きているこの大気に化学物質の影響が拡大されている。人間の脳神経に影響を与え障害となり特に子どもたちに、表面化してきた。 ・街路樹の農薬散布、大津川、江戸川流域の水田には選択の余地の無い空中農薬散布が継続している、また市民が気にしないで撒いている殺虫剤など各家庭に氾濫している物の危険性・安全性などを知らせる。 ・東葛飾地域では化学物質の被害を受けて数回の転居を繰り返している被害者の健康調査を早急にしてほしい。 <p>2. 課題を解決するために、何をすべきですか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・食の安全を重視して、食べ物の残留農薬、ワックスなど化学物質の毒性検査、予期しない複合使用の薬剤の内容検査など環境部と農水部など横串を刺して現行のシステムをどう変えるか、回数を減少させて高濃度を散布しているのでは何もならないので迅速な行動と検査体制を整えていく。 ・県民の中には専門的に優れた方がいるので化学物質の部会などを設置して化学物質の確かな学習体制を整える。 <p>3. 誰が、どのように進めますか。(県民、事業者、行政等の役割)</p> <p>県民は・行政の開催する学習会に参加して化学物質についての確実なことを学び、商品知識を高めて情報を確認し、風評に振り回されないようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・商品の裏ラベルをよく読んでから購入する。 <p>事業者は・化学物質を使用する場合 prtr 法を尊重し、消費者に責任ある態度で望んでほしい</p> <ul style="list-style-type: none"> ・県民が理解できる文言で見えやすい記載をする、 <p>行政は</p> <ul style="list-style-type: none"> ・異なる考えの化・科学者の両方を正しく見極め、委員などに委嘱する時には行政向きの学識者の意見を尊重するのではなく、市民が支持する化・科学者の登用をする。 	

戦略グループ会議 報告書

- ・汚水、大気など事故のある企業には厳罰で臨む姿勢を示していく。
- ・県民には理論の裏付けのデータなどを開示して、県民便りなどにコーナーを作り情報を伝える。インターネットの県のホームページに出すが見られる人は少数で、わざわざ見る人は、行政、環境に対して感心のある人なので、その他の伝えていかなければならない県民への広報を考えていく。
- ・コーディネートをする市民を位置づける。

4. 自由記述

1、東葛飾地域での生物多様性の保全・再生のための課題。

- 1、環境リスクの大きい化学物質につき、効果的にする。
- 2、行政、企業は市民に化学部室の認識させることが最大で早急な課題。
- 3、今、化学物質過敏症で苦しむ人達の存在を認め農薬散布の状況把握を急ぎ、工場の跡地と同様に調べる仕組みをお願いしたい。
- 4、地域における「シックビル症候群」「ビル病」などのデータ把握、年々の増加中の把握、市民への公開により説得に活用する。
- 5、この問題がもっと一版市民が把握できる資料を用意して、専門化の人たちだけの議論で終わるものではない。
- 6、化学物質暴露を防ぐ。
- 7、農業では農薬の規制と実態調査。
- 8、EU REACH
- 9、東葛飾地域では都市化、住宅化が進む中で、この地域の生物のもつ特有のDNAがも失われている。
- 10、緑を守る必要性に迫られている。
- 11、街路樹、街道などの農薬宅地などで使用する農薬の品種調査、
- 12、相続した緑を残そうと強い意志があったが、税金で物納したら宅地にして販売されている。悔しい！

2、課題を解決するために何をすべきですか。

- 1、グループ内から認識を確認
- 2、学者にも二通りあり御用学者に依存することなく、偏らない判断の出来る姿勢を示す。
- 3、委員会の委員も学識経験者も選定する時には両方の判断のできる指導者をお願い。
- 4、専門職、NPOなどの活動家、現場に精通している人から意見を求めてほしい。
- 5、実態が大きな声になっていない。自分と関係ないと思っ手いる人が多いのでないか。
- 6、理論にデータを着け、将来予測をつけて公開
- 7、問題の共有化、問題解決のための議論をして、一人一人が出来ることを進めましょう。
- 8、まず一人一人の心がけ、生活習慣を昔に戻さなければと思います
- 9、あらゆる生物と「緑」と「開発」が対立した場合は必ず「緑」を保全する事業を優先するよう、行政の方向を変える
- 10、体内から化学物質を排出することで解決します。
- 11、松戸市六高台の高層マンションに住み街路樹の消毒散布でシックハウス症候群を発生したことを認識して現場状況を調査し解決策を考えるべきでは。
- 12、農薬の使用調査、学ぶ行動

3. 誰がどのように進めますか。（県民、事業者、行政等の役割）

- 1、県民のネットワークが最大の武器となる。

戦略グループ会議 報告書

- 2、個人では製品の内容を確認して購入するように進める。
- 3、公共機関、学校などでも化学物質使用マニュアルなどを作成するように指導する。
- 4、小中学校では掃除用洗剤の効き目が強い事を周知させ、適量の使用を必ず含むこと
- 5、周知には市民団体を活用する。
- 6、近年行政(市町村)の働きかけがゆるく見える。
- 7、手賀沼、印旛沼水系に排水する地域として認識を広め、保全活動を呼びかける。
- 8、交通量の多い国道、県道、市道に取り囲まれて常に大気中の複合汚染を暴露しているともわれるので調査を！
- 9 P R T R法で届けられた内容を優先的に知らせる努力を早急にしてほしい。
- 10、生活の中にもあることも知らせてほしい。
- 11、インターネットで見られる、見られますは驕りで、県民便りにコーナーを作り地図に落として知らせる
- 12、事実を把握するのは医師見解を役人が租借して基礎データを整理する。
- 13、事業者、医療関係者(千葉大では進んでNPOにしている教授あり)患者、行政、専門市民グループなどが公的に組織化する。
- 14、東京都、神奈川などの前例もあり、千葉県として早急に患者の実態調査をするべき。
- 15、大きな企業の社会貢献の活動に組み込んでほしい。
- 16、一人一人が出来ることを無理せずやりましょう。
- 17、県民の姿勢→行政(企業と市民を指導)→事業者・県民(実行)
- 18、県民は自分の住む地域の「みどり」を保全するために参加し、事業者は「緑」の保全に資金的に支援をし、行政は「緑」の政策へ方向を変える
- 19、市民が、行政、事業者に働きかける、
- 20、市民に働きかける。

その他

- 1、課題提案を聞いて生活に蜜着していることに驚きました。この様な会を県が予算を取り 開催するように進めてほしいです。温暖化しか環境問題というようにどこでも開催しすぎているように見られる、そして3年5年たつと違う新たな推進体制になり、市民がついていけない。
- 2、物事に多くの化学物質が関与していることを知りました。ぜひとも学校教育システムに充実させてほしい。そして早くから教えてほしいです。
- 3、生物がまず生きていなければ多様化出来ない訳で早急に取り組みを期待します。
- 4、このような会議が市民の分かる議論の出来る、参加しやすい会議が、小さい会議が多く開かれるようにしてほしい。
- 5、化学物質を解毒する力をもった土や水や全生物を含む「みどり」をあまりに消軽視してきた付けが私たち人間に、子どもたちに被害をもたらしてきた、まず誰も反対する人のない「みどり」の保護に政策を変えるそのために制度・システムを作る。

戦略グループ会議 報告書

<p><戦略グループ会議の名称> 土木技術者の生物多様性</p>	<p><参加人数> 10 人</p>
<p><主催グループ名> 土木技術者の生物多様性</p>	<p><代表者名> 城之内健一</p>
<p><実行委員名> 山口勇・飯田伸治</p>	<p><共催（協力）団体名> 香取地区土木業者</p>
<p><開催日時> 2007/6/23</p>	<p><開催場所> 香取建設会館</p>
<p><会議で話し合われたテーマの概要> 施工中における、生物多様性『環境問題』によって生ずる諸問題の解決方法 公共工事土木技術者7名・市民3名を交え現場での苦労話からの会議とする 注意 課題1 何をすべきか2 進め方3 を①から⑥までを課題ごと記載されてます</p>	
<p style="text-align: center;">各グループ会議からの提案 各・問題点ごとに話し合いを行なった</p>	
<p>1. 各グループ会議にとって、生物多様性の保全・再生のための課題は何ですか。 ①受注者と発注者との間での契約上の問題から、受注者は市民との対話が難しい。 ②セキレイの繁殖時期に施工が当り工事を休止した ③白鳥の飛来での施工順序を変更した。 ④アレチウリを何とかする対策を検討せよと指示 ⑤カラシナを削除する目的を市民に知らせた ⑥工事名が消波対策工事で、工事目的が仕様書には無かった</p> <p>2. 課題を解決するために、何をすべきですか。 ①共通使用書の1-1-35 8 協議時間を短縮 ②発注前に調査 ③発注前に調査 ④発注前に調査 ⑤住民への説明は誰がすれば良いのかを考える ⑥工事目的を明示</p> <p>3. 誰が、どのように進めますか。(県民、事業者、行政等の役割)</p>	

戦略グループ会議 報告書

- ①発注者と請負者で自然環境に詳しい人を交え協議
- ②発注者は工事が始まっている（仮設工）ので費用負担、簡易調査の実施費用の負担
- ③簡易調査の実施費用の負担
- ④簡易調査の実施費用の負担
- ⑤説明に費やす費用の負担
- ⑥競争入札の仕様書の明示

4. 自由記述

堤防の草花でも使える物はドンドン使用する。食べられるのは食べよ
土木技術者は発注者ばかり見ている事が理解でできた（共通使用書 1-1-35）
莫大な面積の除草工事には、生物多様性の知識が必要（発注者・受注者共）
発注者・建設業協会でも、定期的に勉強会が必要
発注者のコミュニケーション能力（自然科学に対する）の不足
物を作る工種ならば、設計変更が容易だが、自然を保護する工種の変更は難しい
白鳥が来た、オウセッカが居ると突然、市民の方から言われても返事ができない
「白鳥が居ます」と市民から言われたが、発注者は苦情が入ったととらえる
市民は、自分名前を名乗らぬ人が多い
作業員には市民とは、通常の挨拶以外は問題を起こすので話はさせない会社もある
技術者が殆どで面白い会議であった。
今回の会議に市民がもし、沢山参加していたら、どうなった事やら
場所が香取建設会館のために市民を寄せ付けないのかも
土木技術者への理解の為に、ドンドン勉強会を市民に知らせるべきだ
市民から、又呼でくださいの意見あり
効率ばかり考えて、自然を見ない作業をしている

※1枚で収まらない場合は、2枚になってもかまいません。

戦略グループ会議 報告書

<戦略グループ会議の名称> 「教育と生物多様性」 生物と子どもの距離	<参加人数> <p style="text-align: right;">19 人</p>
<主催グループ名> 木更津生物多様性県民会議実行委員会	<代表者名> 吉岡 啓子
<実行委員名> 栗原・小西	<共催（協力）団体名>
<開催日時> 6月29日（金） 18:00～21:00	<開催場所> 木更津市 中央公民館 3F 大会議室
<会議で話し合われたテーマの概要> 「未来の大人達=子供達のために 今の大人達ができること」 「9～10才までの生物（自然）とのふれあいの重要性」 「子供と生物（自然）との距離を」遠ざけているのは、大人達ではないか？」 （参加者 それぞれの活動の中での問題点・現状・気付き等）	
各グループ会議からの提案	
1. 各グループ会議にとって、生物多様性の保全・再生のための課題は何ですか。	
① 「生物多様性」という言葉と内容の認知度の低さ ② 都会とも田舎とも言い切れない中途半端な地域性ゆえの、住民の環境破壊についての危機感のなさ～「茹でたカエル」「井の中の蛙」～ ③大人世代の自然体験のなさ・少なさ、過剰な清潔意識、知識のなさ <div style="margin-left: 40px;"> →関心がない。どうでもよい。 →関心を持つきっかけがない →行動に移すきっかけがない </div> <p style="text-align: center;">★自らの意識と経験がなければ次世代に伝えられない。</p> ④国の施策（1）教育予算の絶対的不足 <div style="margin-left: 40px;"> ～次世代への投資「環境・自然教育」まで着手出来ない </div> （2）教育現場・授業時間数の不足・教員の負担増・理科教師の限界 <div style="margin-left: 40px;"> ～教員は現状で手一杯である </div> （3）環境・自然体験学習の必要性の軽視 <div style="margin-left: 40px;"> ～環境・自然体験学習よりも学力が優先される風潮 </div> （4）開発という名の自然破壊の横行 <div style="margin-left: 40px;"> ～山砂採取・残土産廃埋立・コンクリート護岸工事等が日常化している中で、危機感を持たない・容認している大人たちの姿を見て子供たちが育つ </div>	

戦略グループ会議 報告書

2. 課題を解決するために、何をすべきですか。

★ヒトという生物が、生物本来の生きる力を取り戻せる様、「サル」から「ヒト」へ進化する前の段階の幼児期・児童期の子供に残る「本能」に訴える環境・自然学習、特に体験学習の機会を最大限に用意する

- ① 県内各部署、各市町村への発言力のある環境・自然体験学習に関わる専門部署の新設
- ② 教育現場への、地域性・年齢・成長に沿ったプログラムを用意出来る専門員の配置
- ③ 地域との連携、人材・環境等今現在地域にある資源の最大限の活用
- ④ 県土の広い千葉県ならではの、地域独自の視点・それぞれの地域性（多様性）の重視と、情報の交換・共有
- ⑤ 大人世代への自然体験への理解浸透・きっかけ作り等の啓発活動
- ⑥ 生物多様性を喪失させる、環境汚染や無意味な開発への規制
- ⑦ 第一次産業の振興・第一次産業従事者と連携した授業展開

3. 誰が、どのように進めますか。（県民、事業者、行政等の役割）

行政 I 県及び各市町村に（仮称）環境・自然体験学習課を設置する。

～人材や地域・教育機関の調整を司る。この部署には教育委員会他各部署への発言権を持たせる。

- ① 県内の学校図書館に、教員、司書、学芸員を常駐で置く
～体験と学習を受粉させ実を結ばせる重要な役割を担う～
- ② 県内の学校（及び保育園・幼稚園）に自然観察指導員を置く
～教師の負担軽減と良質な知識の伝授、幼い頃よりの環境・自然教育の充実～
- ③ 上記①②双方と学校職員・地域・NPO等が密に連携を取れる体制を整え、正式な授業として環境・自然体験学習を展開する。
- ④ 学習の中で得た生息・植生などの情報を、共有・蓄積する。
- ⑤ 理科室と図書室の間に博物館がある。ごく当たり前に学校に専門員がいる。自然体験と学習が結び付く三島小学校のフィールドミュージアムの取り組みを県内全校で実施する。「生物多様性研究・情報センター」を学校内に誘致してもよい。
- ⑥ 地域で捕獲した外来生物を解剖の授業の教材として有効に活用する。
- ⑦ 児童期にこそ必要な環境・自然体験学習を優先させる。英語やパソコンの学習は、中学生からで充分。

戦略グループ会議 報告書

- ⑧ 県内各社会教育施設・公民館・図書館・学童保育所、子育て支援センター、サークル、PTA等の団体の研修に積極的に出前講座事業を展開する他、様々なイベントを催す・またはイベントに出展する。

II 第一次産業の振興と子供との接近

～第一次産業従事者は、その土地で生きている＝生物多様性の中にいることを認識する。ヒトの生存にとっても、生きることの原点である。

特に「食べる」ことは「生きる」こと、食物連鎖から生物の繋がりを考えるきっかけとなる。

健全な第一次産業は、健全な子供の育成と生物多様性の保全を支える。～

- ① 第一次産業従事者を講師として教育の現場に招く・体験学習の機会を多く持つ体制を整える。

特に「食育」の観点から、農業・漁業従事者の話を聞く、作業を見学・体験し、実際にその食材を食べる授業を展開する。

- ② 学校給食には、地元の食材を使用する。

- ③ 個人所有の土地であっても、谷戸・自然林等貴重なフィールドを保全・活用してゆく仕組みをつくる。

～行政が土地を地権者から借り上げ、地域住民と子供たちの体験学習の場として提供する～

III 生物と子供との距離を近づける・共存する建築、それを評価する制度作り

- ① 生物が棲める（と共存する）公園の整備

～幼少期に一番身近な自然は公園である。遊具より自然を残す。（再生する）

- ② 上記①同様、生物が棲める（と共存する）校舎・園舎の設計建築

～壁に作られたツバメの巣一つでも、十分に子供たちの五感を刺激し、生物の命の営みを学習する

- ③ 子供に関わる施設の建築に、地元の木材をふんだんに使用する。

～化学物質に反響した生活音・音声はヒトの精神を萎えさせる。

天然素材・特にその土地で生育した木材は、音の反響の他五感の刺激全てに於いて健全な精神発育を促す他、山の荒廃阻止・林業の振興・生物多様性保全・学習の発展にも繋がり、多方面に渡っての貢献が可能

戦略グループ会議 報告書

- ④ 子供に関わる施設の暖房に、地元の間伐材を燃料とする薪ストーブを設置
- ⑤ 子供の遊びや生物の営みを妨げない護岸工事の推奨
～「川に魚が戻った」ことも「川に子供が戻った」ことも喜ばしい
ニュース
- ⑥ それらを推進・発表・評価・表彰する制度づくり
～「工期を短く・経費を少なく」という従来の価値観を塗り替える。
「前例がない」なら、これから例を作ればよい。
未来への投資の取り組みをした企業が脚光を浴びる様な制度を作る。

事業者 I 教育現場への専門家としての積極的協力

～ヒトという生物が生きてゆくための知恵の伝授。科学の進歩・生活の無機質化により失われた、ヒト本来の生命力を呼び戻すことにより、生物多様性を理解するきっかけを作る。

II 職種ごとの取組みと、企業イメージへの積極的活用

～子供の将来と生物の営みに負担をかけない仕事をした企業が脚光を浴びる様に、行政と共に取り組む。

- ① 全ての業種の各企業が、子供の将来と生物の営みに負担を掛けていないことを「カッコいいこと」として大々的にPRしていく。
- ② 特に報道機関は、「子供の将来と生物多様性」に関わる情報を正しく伝達する。
 - ・「地球温暖化」→「地球高温化・高熱化」
※当たり障りのない曖昧な表現を止め、危機感を正しく伝える
 - ・都心のホワイトカラーのみを対象とした情報の発信を止め、第一次産業者の視点での情報発信を心がける。
※特にニュース・天気予報番組は、調和が全ての生命を育むことを正しく伝える。「晴天」を善、「雨天」を悪と決め付けない。

県民 I 自然体験・調査活動への積極的参加・組織の設立。

～学校を中心に、地域ごとに連絡会を設立するなど、学区内の自然環境の状況の把握・調査保全（再生）に努め、体験から子供たちが自ら学べる環境を整える。

(学校ごとのフィールドミュージアムや「生物多様性研究・情報センター」への協力または、既存の子供会やPTA連絡協議会等の活動に組み込んでもよい)

戦略グループ会議 報告書

II 日本人・千葉県民であることに誇りを持つ～意識の向上～

①正しい文化の伝承～物事の本質を正しく伝える～

- ・(知識の詰まった昔話等を) 表面的なことだけを伝えることをやめる。
- ・(外国の真似ばかりせず) 日本独自の自然観を大切にする。
- ・命の循環をすべて見通す(昔は肉屋の店先に豚が丸ごと吊るしてあった。目先のきれい事を求めず、生物の本質を伝える)

②多様性を支える社会づくり

- ・根本的なことやつながりを考える社会づくりを心がける

③時代を(現状を)正しく認識する

- ・結果をすぐに求めない

★今できることを(子供たちのために) やってやる!

4. 自由記述

会議当日、参加者から「親の世代への教育は諦めた。無駄である。」との意見が出た。たとえ「(諦められた) 親の世代が子供の頃に受けた教育が間違えであった」としても、その時代に於いては「子供たちの将来のために考えられた、最高・最善の教育」であった筈だ。「教育」とは、その教育を受けた子供たちが大人になり社会に出て、初めて評価が下るものなのかも知れない。

第二次世界大戦でアメリカ軍の最大の目的は原子爆弾の投下ではなく、自然の恵みを無駄なく利用する、「持続可能な循環型社会を保ち続ける、賢い日本人の文化」を壊すことであった、と聞いたことがある。

高度経済成長で近代的な都市が出来、人々の暮らしは「便利になった」が、それは「豊かになった」わけではない。むしろ昔のほうが「豊かであった」とさえ思う。

勿論、その時代の大人たちが、現代社会を予測するのは困難であったろう。

また、現代から詳細に未来社会を予測するのも困難である。ただ、

- ①とてつもなく厳しい未来が待っているだろう事
- ②その現象が、もう随分と前から始まっている事
- ③様々な痛ましい事故や事件、「コドモ界」に重大な異変が起こっている事
- ④「自然界」、「イキモノ界」にも重大な異変が起こっている事

等など、今気づいている事柄から考えると、一刻も早く・出来る限りの対策をとらなければ、「コドモ」という生物の絶滅も時間の問題であることは予測がつく。

「コドモ」の絶滅は、「ヒト」の絶滅をも意味する。

人間は今、自身が「ヒト」という名の一種の生物である、という感覚を取り戻すべきだ。一種の生物としての営みの基本は、「種の保存」。願いは「子孫繁栄」。

「コドモ」への環境・自然教育投資は「ヒト」を含めた多様な生物を絶滅から救う、この上ない近道であると提言する。

※1枚で収まらない場合は、2枚になってもかまいません。